

はじめに

香月洋一郎

ここで紹介する写真資料は、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する通称「濫澤写真」の一部であり、奄美大島の東北端25キロほどのところに位置する喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）の1935年から36年にかけての写真を集めたものである。

この喜界島の写真について説明する前に、まず「濫澤写真」そのものについて少し述べておきたい。

1982年に日本常民文化研究所が神奈川大学に移管された折、数多くの資料を引き継いだのだが、その中に120冊の写真のアルバムと2520点のバラ写真とがあった。さらにその後、かつての研究所所員であった河岡武春氏の所蔵資料が研究所に寄贈されたが、その中に1023点の写真が含まれていた。前述の120冊のアルバムに貼られていた写真は4049枚であり、この計7592点の写真が、現状での前述した「濫澤写真」になる。

これらには様々な性格の写真が混在しているのだが、その多くは、1930年代の日本列島、朝鮮半島、台湾の景観、民具、生活風景を写したものになる。しかしこれらは残念なことにネガフィルムがなく、その大半は名刺サイズかそれ以下の感光紙に焼きつけられた形でのみ保存されていた。そして、そのうちの一部を除いてネガについての情報は一切伝わっていなかった。あるいは焼失、破損しているのかもしれない、あるいはたとえその一部でもどこかでどなたかが今も保存、所有されているかもしれない。つまり私達はこの写真について完全な所有権を持っていないことになり、その使用についても当然ある制限が課せられているということになる。

しかし一方で、これらの写真は資料としての価値が高く、少しでも早く公開して研究に活用してほしいと私達は考え、また事実、目を追って外部からの

問い合わせが増える状況にある。そのためこのCOEプロジェクト5年間のうち4年間は、この写真の様々な追跡調査を試みて、それを一般公開にむけての準備作業とした。そして本年度、この写真集の刊行に踏み切ることにした。4年間の追跡調査においてはネガの所在について明確な情報を得ることはほとんどなかったのだが、ただ、宮本馨太郎氏の資料を所蔵している宮本記念財団に、朝鮮半島関係の写真があり、日本常民文化研究所にある同地域555点のうち現時点で189点が財団所蔵のものと一致した。

しかしそれ以外の多くの写真については、いわばその「戸籍」は不明ということになる。そうしたなかで、私たちは逆にこうした資料の刊行や今後の一般公開を行なうことをもって「濫澤写真」の存在を社会にアピールし、この写真群についての情報を得るひとつのきっかけにしたいと考えている。もし1930年代に濫澤敬三が撮影させた写真について、何かご存知の方がおられたら、ぜひ私達の研究所にご一報をお願いする次第である。

なお、この写真は濫澤敬三がその撮影において経済面、資材面で様々にサポートしていたことは明らかであり、濫澤敬三の御子孫からは、この写真群は私達の研究所において自由に使ってよい旨の了承はいただいているのだが、前述のように私達はそのネガを所有していない以上、上記のような状況と私達の姿勢をまず明記しておきたい。

またもう一点問題があげられる。この写真は多く台紙に貼られ、その中には台紙に説明文が記されているものもあるが、その説明が必ずしも正確でないものが、ごくわずかだが見つまっている。この写真集にはその台紙の説明文をもとに編集した説明文を

付記しており（どのように編集したかについては「凡例」参照）、追跡調査の結果、その9割以上は正しいと考えてよいと思われるが、この説明文自体の正誤についての情報も私たちは求めている。

以上2点、本資料写真の有している問題点をまず述べてきたのだが、こうしたことについてより詳しくは、2007年に私たちが刊行したCOEの調査資料4「手段としての写真——「濫澤写真」の追跡調査を中心に——」の内容を参照ねがいたい。

ただし、ここで紹介する喜界島の写真については、その撮影者もわかっており、例外的なことにその撮影状況もある程度までたどることができる。そのことについても、実は前述した『手段としての写真——「濫澤写真」の追跡調査を中心に——』の中でふれている。本書の刊行はその作業の延長線上にあるのだが、本書は本書で一写真集としての独立性も有しているため、前書で述べたことの一部をここでも示しておきたい。なお写真の点数表記などに前述の刊行物と若干の差異があるのだが、本稿で述べたものが最も新しく正しいデータとなる。

さて喜界島を写した写真はアルバム8冊分の274点、バラ写真109点の計383点であり、これらのほとんどは1943年に40歳で亡くなった民俗学者の岩倉市郎が写したものになる。この間の事情については、当時岩倉氏の助手をつとめていた拵嘉一郎氏（1914～）がご存命であり（ほとんどが岩倉市郎撮影、と書いたのは、そのごく一部に拵氏が写されたものも含まれているからである）、2007年の秋に神奈川大学日本常民文化叢書7として刊行された拵氏の手記『濫澤敬三先生と私 アチック・ミュージアムの日々』（平凡社）の一部には次のようなくだりがある。

「岩倉さんが喜界島の民俗調査を始めるに当たって、私を助手として声をかけて下さったのは、岩倉さんが小学校の先生として教鞭を執っていた時の教え子の一人であった事と、同じ集落の者として私の性格や家庭事情も充分知悉していた事や、私の病気にも相当配慮した上、多少の活動はかえってアフターケアにもなると、自分自身の病気の体験から、好

意的に思いやりの判断をした事等が、大きな理由であったと思う。（中略）

私が岩倉さんの誘いに応じ、勤め人のように、毎日岩倉さんの家へ日参しだしたのは、昭和十一（一九三六）年陰暦一月十五日の小正月が済んだ直後の事だったと記憶している。

岩倉さんは、仕事を始めるに当たり、この学問がどのような学問であるのか、またこの調査がどのような目的をもち、どのような手順で、どのような調査をするのか等について、『喜界島生活調査要目』（岩倉市郎作成の調査要項——编者注）の内容に触れながら、詳細な説明をしてくれたが、当時の私の知識や能力では、それを十分に理解するには程遠く、不安の中での出発であった。

岩倉さんは、そんな不安を持つ私の心情を察してか、

『そんなに難しく考える事はない。仕事をしていく段階で、少しずつ勉強して理解していけば良いが、ただ君がやる仕事の概略と、本調査に当たって絶対に守っていかなければならない基本的な条件があるので、その事だけは最初から理解して守って貰わなければならないので、その事について話をしておきたい。』と、説明された内容は粗方次のような事であった。

一 調査の段階で発見される古文書や記録類は、判読出来るのは君がそれを写録する。しかし、判読出来ないものについては、自分が別途考慮するから、絶対に当て推量で写録しない事。

一 聞き取り調査は、一人より二人同時でやった方が、より正確を期する事になると思うので、調査は出来るだけ二人で出掛ける事にするから、その中で君は調査の方法、手順、要領等を学んで貰い、後々自分一人でも何とか調査出来るよう勉強して貰いたい。

一 写真は調査の補助的資料としても、また写真そのものが資料となる場合でも、絶対欠かせないものであるから、数多くの写真を撮る事になるであろうから、その撮影から現像焼き付け迄、全て二人でやる事になる。その為必要な写真機や写真器材は、全て東京から持参して来てあるので、後は二人で適

当な暗室を作る事にしたい。

一 喜界島の食文化の調査をしたいので、大変な仕事になると思うが、一年間を通じての喜界島の農家の食事日誌を、細大洩らさず、正確に正直に書いて貰いたい。

ただし、文の構成や文章のまずさ等は全然関係ないから、変な修飾などはしないで、ありのままを書いて貰えればそれで良い。

一 この調査全般に渡って言える事だが、臭い物には蓋をしろと言う概念は一切捨て去って、間違ってもこれを犯す事がないよう充分注意して欲しい。

一 自分は速記が出来るので、聞き取り調査は速記で採集し、それを翻訳しなければならないが、更にこれを原稿用紙に清書する作業がある。勿論自分もやるが君にも少し分担して貰いたい。

一 君は青年会の役員をしているから、青年会の行事に参加する場合は、この調査に優先する事にする。

一 調査にはバスを利用する事もあるが、原則的には小回りの利く自転車を利用する事にする。

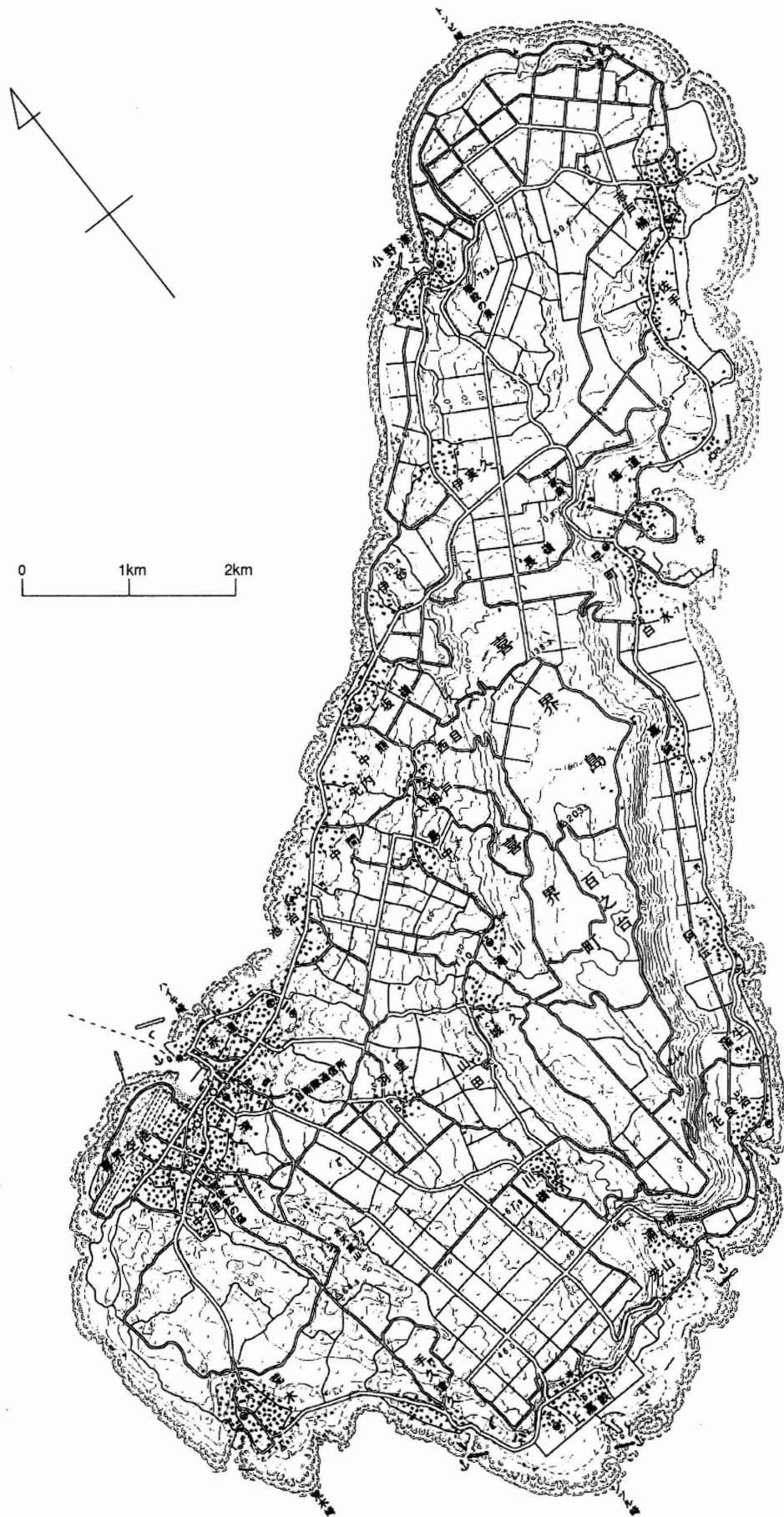
(中略)

岩倉さんが私と一緒に、最初に手がけたのは、写真現像の為の暗室作りから始められた。ご両親の御

諒解を得た岩倉さんは、岩倉家の表座敷の裏部屋に当たる通称「クッダッ」といわれる部屋の目張りや、暗幕の設置、パットの置き台、乾板の置き場所、プリントの吊し場、水洗いのための盥の置き場所等、素人の二人では中々大変な事ではあったが、何とか使える暗室らしきものを作り上げる事が出来た。

私は、この暗室作りに岩倉さんの仕事に対する取り組み方や、どんな小さな事でも決しておろそかにしない物事への対処の仕方、或いは仕事に対する情熱を学び取る事が出来て、人としてのあり方を教えられたような気がした。」

いずれにしても、今回の写真集の刊行は、こうした調査や写真資料を再検討したり研究をすすめるための第一歩にすぎず、写真の説明文も当初「濫澤写真」に付せられたものに、原文の意を尊重しつつ若干編集上の手を加えて付したものであり、また編者としての注は最低限にとどめている。私たちもこれからさらに調査をすすめるなければならないのだが、本書の刊行を機に今後様々な方面からの活発な御意見、また諸情報の交流を期待し、いつの日かさらに完全を期した写真資料集としての刊行が成ることを祈って筆を擱きたい。 (かつき・よういちろう)



喜界島全図 面積は55平方キロ余。人口は9000人余り。隆起サンゴ石灰岩からなる島である。国土地理院五万分の一地形図「喜界島」より